

[研究報告]

KOMI ケア理論の実践領域における活用実態とその有用性

石川 恵子・金井 一薫

[研究報告]

KOMI ケア理論の実践領域における活用実態とその有用性

石川 恵子*・金井 一薫**

KOMI ケア理論は、ナイチンゲール看護思想をベースに金井一薫が構築した現代ケア論である。本理論は日本のケアを担う多彩な職種と実践場所において、すでに四半世紀にわたって活用されてきた。本論文は、1997年に発足し、2018年にその使命を終えて閉会となった「KOMI ケア学会」において発表された22年間分の文献を研究対象として、KOMI ケア理論の活用実態とその活用の有用性について明らかにしたものである。分析にあたっては、量的研究と質的研究の混合研究法を用いた。

結果として、KOMI ケア理論は多職種によって活用・実践され、その有用性は〈看護過程展開〉のストーリーに照らして浮き彫りにされた。つまり、KOMI ケア理論は実践者たちが〈ケアの方向性を見失うことなく〉導く実践理論としての性質をもち、課題解決過程のどの段階においても有効的に活用できるという結論に至った。

キーワード：KOMI ケア理論、実践理論、活用実態、有用性

はじめに

KOMI ケア理論（以下、「本理論」）は、ナイチンゲール看護思想をベースに、金井一薫が構築した現代看護（ケア）理論である。KOMIとは、1993年に金井によって作成された1枚の「生活過程評価チャート」（以下、「KOMI チャート」）に固有の名称をつけたときに採用した名称である。代表的な文献、『KOMI チャート—日常ケアの実践を導く方法論』¹⁾、『KOMI 理論—看護とは何か、介護とは何か—』²⁾は、今日まで多くのケア実践家の支持を受け、看護・福祉実践現場に変革をもたらしてきた。

KOMI ケア理論を展開する実践者たちが声をあげ、研究学会（KOMI 理論研究会）を設立したのは1997年で、その年に第1回 KOMI 理論学会が開催された。2009年には、KOMI 理論学会の活動を継承する形で、特定非営利活動法人として東京都から認可を受け、「NPO 法人ナイチンゲール KOMI ケア学会」と名称を改めた。そして、2019年3月、全会員一致の合意を得て使命を終えて解散するまでの22年間にわたり活動を継続し、22回分の学会集録を知的財産として残した。学会集録には多くの実践報告が掲載されているが、その評価は始まったばかりである³⁾。

本論文では、22年間にわたり KOMI ケア理論を支えてきた実践者たちの実践内容を、学会集録を研究対象としてつかみ取り、KOMI ケア理論が如何に活用されてきたのか、また理論の有用性は確認されたのかという点に焦点を絞り、考察することとした。今とこれからの時代にあって、KOMI ケア理論を実践の礎とする人々にとっ

て、本理論の有用性を確証することは、きわめて有意義なことと考えるからである。

1. 研究の目的

KOMI ケア理論の活用実態の全容を把握し、活用の効果がどのように現れているのかを明らかにすることが本研究の目的である。

2. 先行研究

KOMI ケア理論は、これまで広く一般に、病院、施設、在宅、教育現場において活用されており、『学会集録』以外にも多数の文献があるはずである。医学中央雑誌パーソナル Web (Ver.5) 及び最新看護索引 Web, CiNii Articles での検索を行った。検索の結果、文献執筆者の所属施設の紀要や病院誌、日本看護学会論文集、各種雑誌において活用実態とその効果（有用性）が報告されている。文献検索の結果は以下のとおりである。

1) 1997年から2018年までの先行文献は48件

1997年から2018年までの期間で、キーワードを(1)「KOMI チャート」and「活用」、(2)「KOMI チャート」and「効果」、(3)「KOMI チャート」and「有用性」、(4)「KOMI ケア理論（又は「KOMI 理論」、以下同じ）」and「活用」、(5)「KOMI ケア理論」and「効果」、(6)「KOMI ケア理論」and「有用性」、(7)「KOMI ケア」で130件の検索数があった。その中から会議録、解説、重複、実践領域以外の文献を除き、抄録または本文のある原著論文に絞り検索した結果、(1) 25件、(2) 12件、(3) 3件、(4) 2件、(5) 5件、(6) 0件、(7) 1件の計48件となっ

*大学院看護学研究科博士前期課程 **大学院看護学研究科

た。

2) 先行研究 48 文献から明らかになったこと

48 文献から明らかになった《活用の効果》は、以下の 8 点にまとめることができた。

- ①情報の可視化と共有
- ②多職種間で患者ができることを共有できる
- ③必要なケアが見える
- ④患者の自信や意欲の向上
- ⑤看護師の関わりの変化
- ⑥可視化できる評価
- ⑦ケアの継続性を保証
- ⑧患者の持てる力を活用した援助

また、全体として文献執筆者たちは、KOMI ケア理論のコアの概念を表す「ケアの5つのものさし」を使いながら、患者の問題点探しに集注することなく、《解決すべき生活上と健康上の課題》を見だし、《看護の方向性》を打ち出していたことが見えてきた。

しかし、先行研究で明らかになった効果の多くは、KOMI ケア学会活動時期の第Ⅰ期（1997～2003年）と第Ⅱ期（2004～2009年）に44文献（91.7%）が集中しており、第Ⅲ期の2010年以後は4文献（8.3%）にとどまっていた。以上より、先行研究の論文のみでは本理論活用による有用性の全容把握には至らないと考え、先行研究から導き出された事実をさらに裏付けるために、第Ⅲ期（2010～2018年）を含む22年間の学会集録全体を分析する必要があると判断した。

3. 研究方法

研究デザイン

KH Coder（計量テキスト分析）と質的統合法（KJ法）を用いた混合研究方法である。

研究期間

2018年9月～2020年2月まで

研究対象

KOMI ケア学会 22 年間の学会集録から、会長講演、特別講演、シンポジウムなどで発表された内容を除く 245 文献（実践領域 131 文献 53.5%，教育領域 37 文献 15.1%，管理領域 36 文献 14.7%，研究領域 17 文献 6.9%，その他 24 文献 9.8%）のうち、実践領域 131 文献を精読し、実践事例の報告がある 94 文献を研究対象とした。

研究素材の作成

次に、94 の文献執筆者がその文献の中で、良い結果が出た、望ましい状態に変化した、役に立った等、《有用性あり》としている記述全体を文脈単位で抽出し、105 の研究素材を作成し通し番号を付した（資料省略）。

分析方法

量的研究と質的研究の混合研究方法を用いて検証した。研究素材を「KH Coder（計量テキスト分析）」⁴⁾⁵⁾では、

量的・質的に内容分析を行い本理論の「活用実態」を明らかにした。「質的統合法（KJ法）」⁶⁾では、質的分析にて「活用の有用性」を抽出し、それを構造化して全体像を明らかにした。

1) KH Coder による分析

研究素材 94 文献をテキスト型データに変換して KH Coder に登録し、本理論の《活用実態》を、次の手順に沿って明らかにした。

- ①テキスト型データ全体の総描出語数、分析対象とした語、出現語数のリストを作成した。
- ②データから機械的に取り出した「語」同士が、どのように似通った文脈で使われているかを「共起ネットワーク」で確認し、視覚化できるネットワーク図から、本理論 22 年間の活用実態を明らかにした。
- ③KOMI ケア学会 22 年間の活動を、学会の活動時期、第Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期を外部変数とした「対応分析（コレスポネンス分析）」で確認し、視覚化できる二次元の散布図から、活動時期別の特徴を明らかにした。
- ④注目したいコンセプトとして「ケアの方向性」と「ケア展開のツール」をコード名とし、出現状況の探索を目的にコーディング・ルールを作成し、コード出現率を算出した。

コード名「ケアの方向性」の条件：「ケア and 方向」or「ケア and 視点」or「看護 and 方向」or「看護 and 視点」or「目標」or「ケアの5つのものさし」

コード名「ケア展開のツール」の条件：「KOMI レーダーチャート」or「KOMI チャート」or「KOMI チャートシステム」or「KOMI 記録システム」or「開発チャート」or「ケアリングシート」or「サークルチャート」or「ケアの5つのものさし」or「サマリーチャート」or「ケアプランシート」or「KOMI ケア理論」

2) 質的統合法（KJ法）による分析

質的統合法（KJ法）を用いて、本理論の「活用の有用性」を明らかにした。なお、質的統合法の手順である、「ラベルづくり」は研究素材、「ラベル広げ・ラベル集め・表札づくりのグループ編成（繰り返し）」はコード・サブカテゴリー・カテゴリー、「図解化（見取り図、本図解、シンボルモデル図）」は結果図、「叙述化」はストーリーラインと表現した。

- ①研究素材 105 の文章を吟味し、「ラベル」のレベルまで抽象化して、基礎データ（研究素材の概要）を作成した（資料参照）。
- ②「研究素材の概要」をさらに「コード」レベルまで抽象化した（資料参照）。
- ③「コード」内容をさらに抽象化して「サブカテゴリー」を作成した（資料参照）。
- ④「サブカテゴリー」を基に、「カテゴリー」を作成した（資料参照）。

⑤カテゴリー同士の関係性から「結果図」を示し、質的統合法(KJ法)によって明らかになった事実を文章化した「ストーリーライン」を作成した。

用語の定義

KOMI ケア理論：ナイチンゲール看護論を基盤に、看護と介護を統合した思想体系をもつ金井一薫が構築した現代看護(ケア)理論である。構造は、「目的論」、「対象論」、「方法論」、「いのちのしくみと疾病論」、「管理論」、「教育論」から構成され、対象論は、「生命過程」、「認識過程」、「生活過程」、「社会過程」、「自然過程」の5つの構成要素で成り立つ。また「方法論」は、「看護過程の展開」を通して看護の目的を実現するように組み立てられており、方法論展開の道具として数種類の「ツール」が用意されている。

ケアの5つのものさし：ケアの目的を実現するために、その時、その場の判断の基準と方向性を示すもので、以下のように示す。

- (1) 生命の維持過程(回復過程)を促進させる援助
- (2) 生命体にとって害となる条件・状況をつくらない援助
- (3) 生命力の消耗を最小にする援助
- (4) 生命力の幅を広げる援助
- (5) 持てる力、健康な力を活用し、高める援助

KOMI レーダーチャート：その日、その時の「生命過程」の状態を判定するアセスメントツールである。16項目を判断基準にして、身体の状態が一目で見取れるようにレーダー状に作成したチャートである。

KOMI チャート：その時の認識の状態と生活の状態を判定するアセスメントツールである。KOMI チャートには77項目(認識面31項目・生活行動面46項目)のアセスメント項目があり、できあがったチャートは、患者の今現在の「生活の自立度」を表す。

KOMI 記録システム：方法論展開のための総合的ツールであるKOMI レーダーチャートとKOMI チャートを中心としたアセスメントシステムに加えて、病院などの急性期ケアの現場においても使用できるよう、①KOMI ケアリングシート、②KOMI 治療展開シート(ケアリングパス、ナーシングパス)、③KOMI 場面シートが付加された記録様式である⁷⁾。

開発チャート：本理論を導入している病院の看護師によって開発された各種のチャート類である。未熟児に活用するベビーレーダーチャート、重心児用のKOMIチャートなどがある。

分析の妥当性・信頼性を保持する方法

本理論の実践領域における活用実態とその有用性を明らかにするために、実践領域での本理論活用の経験を活

かしながら分析を深めた。質的統合法(KJ法)の分析過程では、手作業によるラベルづくり、ラベル広げ・ラベル集め・表札づくりのグループ編成を繰り返し行い、質的研究の経験が豊富な指導教員と分析内容について議論を重ね、分析の妥当性と信頼性を確保した。計量テキスト分析は、KH Coderの作製者が講師を務めた「KH Coderを用いた計量テキスト分析 実践セミナー初級編(2019.08)」、「KH Coderを用いた計量テキスト分析 実践セミナーステップアップ編(2019.09)」に参加し、分析手法を学んだ。

倫理的配慮

研究対象の文献は、公表された印刷文献を用いた。また、知的財産として残した22回分の学会集録の扱いについては、最終の第9回ナイチンゲールKOMI ケア学会学術集会の総会(2018年6月2日)において、学会解散以降の集録活用の許可を会員の全員一致で得ている。集録資料および文献資料の取り扱いには個人情報や著作権等に留意し、慎重に取り扱った。

4. 結果

1) KH Coder(計量テキスト分析)による分析結果

(1) 分析対象語と出現語数

描出語総数5,446語、異なり語数(分析対象)1,308語、出現回数平均は約4.16、1回だけ出現した語は680種類であった。本研究では6回以上出現している語を分析対象とし、うち名詞、サ変名詞、未知語(KOMI)、タグ語(KOMI ケア理論など特殊な品詞名を強制抽出語として指定)を分析対象の語とした。動詞は、考える(36)、行う(31)、整える(31)など主語となる名詞に続く語としてイメージできるため除外した。分析対象の語の出現回数は、ケアが146回と最多で、生活(105)、患者(97)、看護(90)、過程(70)、力(63)、KOMIチャート(62)、生命(54)、利用者(49)、視点(48)と続いていた。

(2) 共起ネットワークで示す本理論の活用実態(図1)

分析対象の名詞、サ変名詞、タグ語、未知語をもとに、最小出現数8、最小文書数1、描画数130、Jaccard係数0.2以上で共起ネットワークを描画した。

共起ネットワークは、共起する(よく一緒に出現する)「語」同士を線で結んだネットワーク図で、円の大きさは「語」の出現回数、色分けはお互いに強く結びついている「語」のグループを表し、線の太さは共起の程度に応じて変化する。共起が強く表れていたのはJaccard係数0.7以上の「持てる一力」、「快一刺激」、0.35以上の「情報一共有」、「KOMIチャート一生活一過程一生命一」幅、「看取り一終末期一その人(らしさ)」、「看護一視点」、「ケアの5つのものさし一促進一回復」などであった。各ノード間の距離は意味を持たない。色分けされた

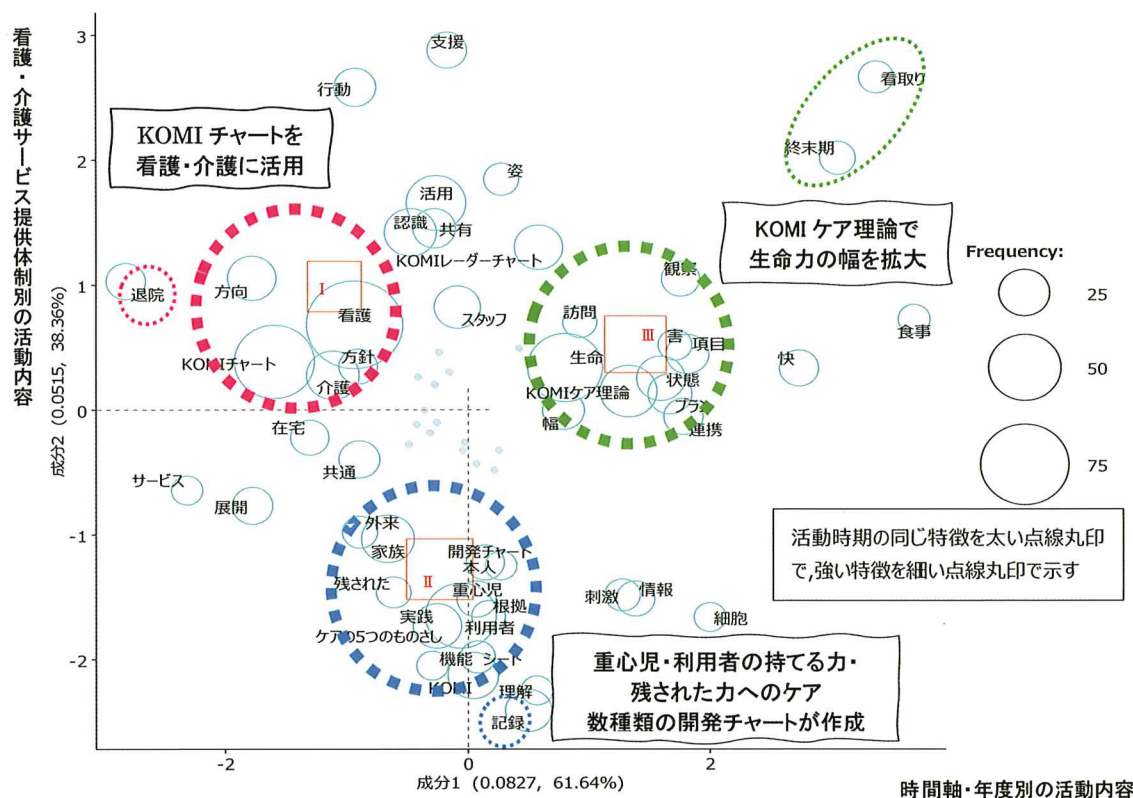


図2 対応分析 KOMI ケア学会活動時期別の特徴

回復機能を促進, ⑩ケアの質の確保と向上, ⑪看護者—患者関係の変化, ⑫やりがい・喜び, ⑬可視化による評価, ⑭QOLの拡大, ⑮多職種連携が可能, ⑯実践が記録に反映, ⑰ケアの継続性を保証, である。

17の категорияは, KOMI ケア理論の学的構造を構成する「方法論」の視点を使って吟味した結果, 1. 観察・事実の情報化, 2. アセスメント・課題の明確化, 3. 計画立案, 4. 実施・結果, 5. 評価, 6. 記録, という、「看護過程展開」の各段階に分類できた。これを「結果図」(図3)に描くことでストーリーラインが明確となった。ストーリーラインと結果図(図3)

結果図により, 実践領域における KOMI ケア理論活用の効果(有効性)は一目瞭然である。

《看護過程の展開》における〈観察・事実の情報化〉の項目では, 実践者たちは KOMI ケア理論を活用することで【観察の視点の明確化】がなされ, それは【可視化できる情報】であると認識していた。

〈アセスメント・課題の明確化〉にあたっては, KOMI ケア理論によって【チームで判定基準を共有】でき, 【今後の予測が可能】となり, 【多領域にわたるケアの指標】を活用してアセスメントできると述べている。

〈計画立案〉においては, 【ケアの方向軸がぶれない】

と評価しており, 実践者の自信につながっている。

〈実施・評価〉の段階では, 対象者の【生きる力を引き出す】ことは【その人らしさの追求】を可能にし, 【心身の回復機能を促進】すると述べており, 結果として【ケアの質の確保と向上】を促し, 【看護者—患者関係の変化】が生まれ, 看護・介護者に【やりがい・喜び】をもたらすと述べている。

〈評価〉の項目では, 【可視化による評価】ができる点を強調しており, KOMI ケア理論の活用で, 利用者の【QOLの拡大】がもたらされ, 【多職種連携が可能】となる点を効果として挙げている。

〈記録〉においては, 【実践が記録に反映】し, 【ケアの継続性の保証】につながっていた。

〈図3〉の右側の縦列の記載は, 多領域に属する文献執筆者らが〈ケアを展開〉するにあたっては, 多くの場合, 本理論が内包する理念・概念を表す(ケアの5つのものさし)を用いて実践していることが見て取れる。またその実践には KOMI ケア理論が用意しているケア展開のツールである〈レーダーチャート〉, 〈KOMI チャート〉, 〈各種開発チャート〉, 〈KOMI 記録システム〉, また〈ナーシングパス〉, 〈スタンダードケアプラン〉などが活用されていることがわかる。

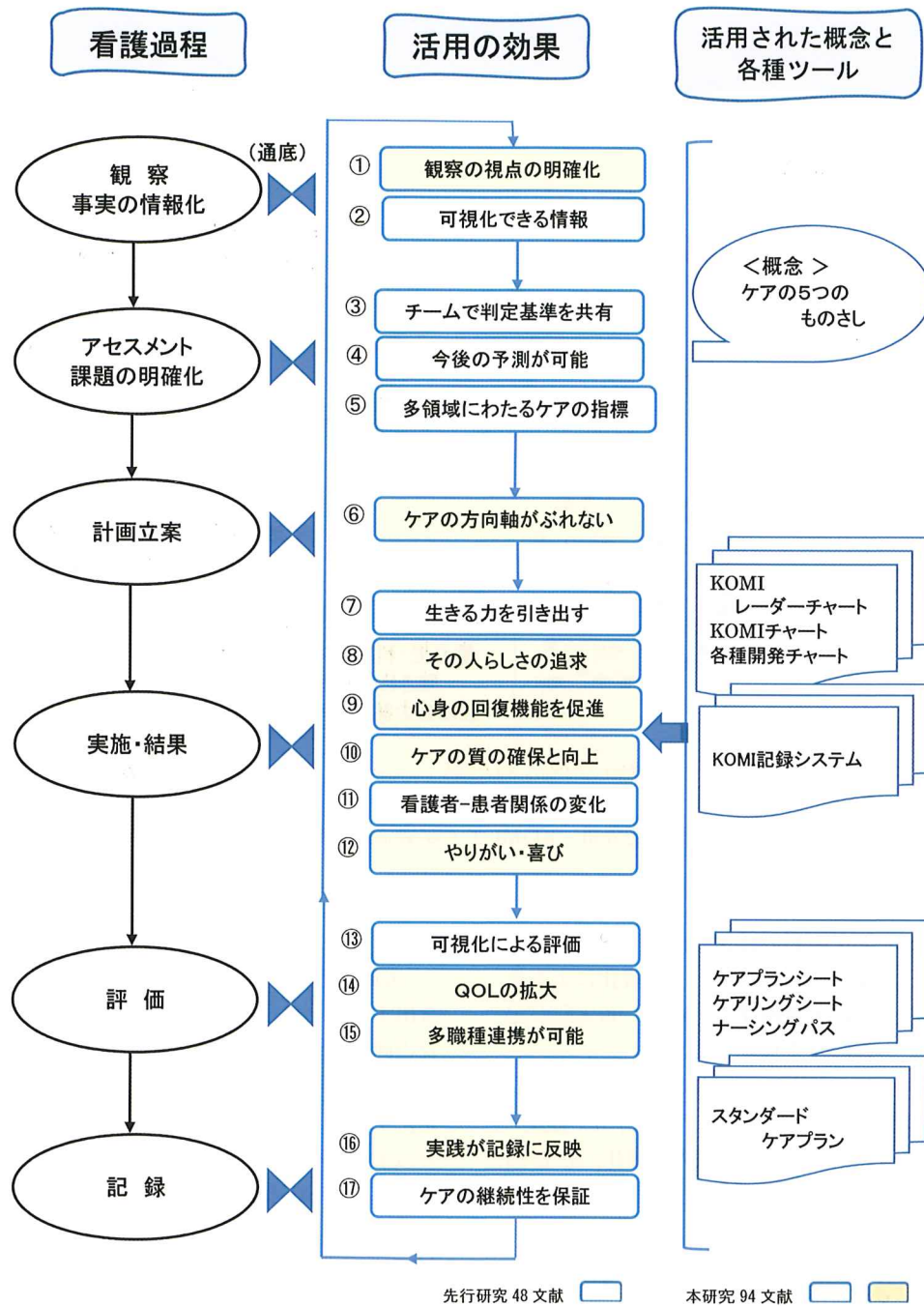


図3 結果図（看護過程と KOMI ケア理論活用の効果との関連）

5. 考察

本研究では、KOMI ケア学会で報告された実践領域の 94 文献を対象とし、KH Coder では量的・質的に本理論の 22 年間の「活用実態」の内容分析を行い、質的統合法（KJ 法）では「活用の有用性」を明確にしていくという、混合研究法を適用した。

結果、KH Coder からは活用実態のみならず「活用の有用性」が、また、質的統合法（KJ 法）からは活用の有

用性のみならず「活用実態」をも見いだすことができた。

ここでは、この 2 つの研究法から得られた結果を相互に比較・統合しながら考察する。

1) KH Coder で明らかになった活用実態と有用性

(1) 共起ネットワークから見た活用実態と有用性

研究対象の文献執筆者らが本理論の有用性を認識し、繰り返し使用してきた「語」の積み重ねが、事実に近い活用実態の姿を描き出したと考える。出現した語の中で

注目すべき語「力」は、持てる力、残された力、生命力を指しており、本理論活用の中心軸となっていた。

ネットワーク図に点線でグループ化した4領域は、22年間の本理論の活用実態を表し、「KOMI ケア理論」と「実践」の共起からは、本理論が実践理論であることが確認できた。

各グループの「語」同士の共起からは、活用の有用性も見て取ることができた。理論のコアとなる概念の活用実態からは「ケアの方向性を示す」、[看護の視点を示す]、[多領域にわたるケアの指標]、[その人らしさの追求]の効果が、ケアの5つのものさしの活用実態からは「ケアのものさしが判断基準となる」が、方法論展開のツールの活用実態からは「チャートを活用して生活過程を整えることがケアに繋がる」、[ケアの方向軸が現れる]、[生命—生活の幅の拡大]、そして、病院・施設・居宅など実践での活用実態からは「ケアの継続性」、[情報共有]、[生活やケアの質確保と向上]の効果が確認でき、質的統合法 (KJ 法) から導いた活用の有用性の裏付けとなった。

(2) 対応分析から見えた活用実態と有用性

外部変数として「KOMI ケア学会活動時期別」を設定し、作成した二次元の散布図から分析を行った。散布図に点線丸印で囲んだⅠ期は「KOMI チャートを看護・介護に活用」、Ⅱ期は「重心児・利用者の持てる力・残された力への活用」、Ⅲ期は「KOMI 理論で生命力の幅を拡大」に、活動時期別の特徴がみえた。「時間軸・年度別の活動内容」の左右の位置関係でⅠ・Ⅱ期は近く、Ⅲ期が僅かではあるが少し離れた位置に布置していたのは、Ⅰ・Ⅱ期が看護・介護の視点の共有や理論を活用した事例研究、記録用紙の活用の発表が中心であったのに対し、Ⅲ期はNPO 法人化により、外に向かって本理論の啓発と普及を目指すという目的に活動を拡大していった時期と一致していた。一例を挙げると、2001年6月、「高齢者の終末期の医療及びケア」に関する日本老年医学会の「立場表明」があり、2001年の第5回KOMI 理論学会では、小南⁸⁾による「“人の死”をケアの視点で見つめる」の演題で、終末期における看護介護ケアの意義について特別講演が行われた。それを期に、KOMI ケア学会では折に触れて終末期・看取りケアのあり方について考え⁹⁾、2016年の「ナイチンゲール KOMI ケア学会・20周年記念集会」では、訪問看護ステーション、介護施設、一般病院、重心児の病院から終末期・看取りケアの実践報告がされた。このように継続した取り組みの中に、その時代に要請されている事柄を学会活動に盛り込んでいることが散布図から見て取れた。

活用の有用性は、学会時期別の特徴が強く現れていた語の中に確認することができた。第Ⅰ期の「退院」からはKOMI チャートが示す生活の自立度によって「退院後

の生活をイメージ化できる」効果、Ⅱ期の「記録」からは方法論を支える記録ツールや「開発チャート活用」の効果、Ⅲ期の「看取り」、[終末期]からは「ケアの方向性を示す」効果が確認でき、共起ネットワーク同様、質的統合法 (KJ 法) から導いた活用の有用性の裏付けとなった。

2) 質的統合法 (KJ 法) から明らかになった本理論の活用実態とその有用性

本研究で明らかになった活用の効果である17カテゴリーは、1. 観察・事実の情報化、2. アセスメント・課題の明確化、3. 計画立案、4. 実施・結果、5. 評価、6. 記録、という、「看護過程展開」の各段階に分類・配置することができた。また、先行研究で明らかになっていた活用の効果も本研究と同様の効果を出しており、ケア展開のツールの使用が有効であることが再確認できた。

KOMI ケア理論の実践現場での活用時には、実践者たちはケア展開のために用意されたケアの5つのものさしを中心とする理論のコアとなる概念を活用し、同時に豊富な記録ツールを駆使していた。そしてツールの可視化できる特徴を用いて情報を収集し、それをアセスメントに活かし、そこから得られる全体像を基に「ケアの方向性」を定め、ケアプラン作成に繋げていた。実践された内容は、対象者の「生きる力を引き出す」と共に、「看護者—患者関係の変化」をもたらし、看護者の「やりがい・喜び」を生み出していた。さらに「実践が記録に反映」され、チームによる「ケアの継続性を保証」していた。

3) 「ケアの方向性」のコード出現率と本理論の本質

KOMI ケア理論は、ケアの目的の実現に向け、「ケアの方向性」を示す理論である。ケアの目的を、金井¹⁰⁾は次のように定義している。

「看護（ケア）とは、体内に宿る自然治癒力＝生命の回復のシステム＝生命の自然性が、体内で発動しやすいように、その人を取り巻く生活の条件・状況を、生命力の消耗を最小にするように、またもてる力を最大に発揮できるように、最良の状態に整えることである。」

なされた実践がケアの方向性を示しているかを評価するとき、この定義が考え方の根幹にあることが必須条件である。KH Coder のコーディング・ルール「ケアの方向性」では、平均55.32%というコード出現率を得た。活動時期別による有意差はなく、常に一定して高い値を示していた。

一方、質的分析法 (KJ 法) をみると、データ（研究素材）からは「ケアの方向性」、「看護の視点」、「ケアの方向軸」、「次に何をすべきかが見える」、「患者の希望を実現」、「患者の尊厳を守るケア」、「退院後の生活を描ける」といった、「ケアの方向性」を意味する言葉がふんだんに使用されていることが確認できた。ここにおいて

も KOMI ケア理論を用いて展開する実践者は、常に「ケアの方向性」を確認しながら行っていることが明らかとなった。

4) KOMI ケア理論活用の有用性

竹原¹¹⁾は、看護理論の評価と検証というテーマにおいて、「有用性のクリティークは、その理論が看護にとってどのように役立つか、実践、研究、教育、および管理の領域において、批判的に吟味することである」とし、Meleis (2017) が示す視点を紹介している。Meleis は、実践における理論の有用性は、「その理論は実践の方向性を示すか、実践に適用可能であるか、一般化可能性があるか、費用対効果はあるか、看護過程や看護技術との関連性があるか」と、分析する視点を挙げている。

今回の研究を通して、KOMI ケア理論は実践に適用可能で、看護過程の展開を通してケアの目的を実現するように組み立てられていることが証明できた。このことから本理論は、Meleis が示す「実践における有用性あり」の基準を満たしているといえる。

結果として、KOMI ケア理論は看護実践を看護的に導く実践理論であり、看護過程展開のどの段階においても有効的に活用できると考察できた。

結論

1. KH Coder の分析結果から、共起ネットワークは、[理論のコアとなる概念の活用実態]、[ケアのものさしの活用実態]、[方法論展開のツールの活用実態]、[病院・施設・居宅など実践での活用実態] という4つの分野が視覚的に描画され、KOMI ケア理論22年間の活用実態が明確になった。対応分析による視覚的描画からは、Ⅰ期(1997～2003年)は[KOMI チャートを看護・介護に活用]していた時期、Ⅱ期(2004～2009年)は[数種類の開発チャートが作成]され、[重心児・利用者の持てる力・残された力へのケア]を実践していた時期、Ⅲ期(2010～2018年)は[KOMI ケア理論で生命力の幅を拡大]という、KOMI ケア学会22年間の活動時期別の特徴を明確にできた。
2. 質的統合法(KJ法)からは、101のコード、35のサブカテゴリー、KOMI ケア理論活用の効果にあたる17のカテゴリーが導き出された。17のカテゴリーを構造化した結果、KOMI ケア理論活用の有用性との関連を「結果図」として表すことができた。
3. KH Coder のコーディング・ルールで「ケアの方向性」は平均55.32%というコード出現率を得た。一方、質的統合法(KJ法)では「ケアの方向性」を意味する言葉が研究素材にふんだんに使用されており、いずれからもケアの実践者たちは「ケアの方向性」を確認しながら実践していることが明らかとなった。
4. 本研究全体を通して、KOMI ケア理論は、多領域で

活動している実践者たちによって活用されている実態が明らかにされた。彼らは理論のコアとなる概念や実践展開のために作成された多くのツールを活用しながら、「ケアの方向性」を見失うことなく実践していた。結果、KOMI ケア理論は看護実践を看護的に導く実践理論として、看護過程展開のどの段階においても有効的に活用できるという結論が導き出された。

付記

本研究は、徳島文理大学大学院看護学研究科・令和1年度・修士論文の内容の一部を加筆・修正したものです。

文献

- 1) 金井一薫：KOMI チャート—日常ケアの実践を導く方法論—，現代社，1996.
 - 2) 金井一薫：KOMI 理論 看護とは何か，介護とは何か，現代社，2004.
 - 3) 魚崎須美，石川恵子，金井一薫：KOMI 理論の有効性の検証—第一報—21年間の全学会集録の分析から見た活用実態—，ナイチンゲール KOMI ケア学会第9回学術集會集録，21-24，2018.
 - 4) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—，理論と方法，19(1)，101-115，2004.
 - 5) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析，ナカニシヤ出版，2014.
 - 6) 山浦晴男：質的統合法入門 考え方と手順，医学書院，2012.
 - 7) 金井一薫：実践を創る 新・KOMI チャートシステム—ナイチンゲール KOMI ケア理論にもとづく「看護過程」の展開—，現代社，2013.
 - 8) 小南吉彦：“人の死”をケアの視点でみつめる(第3報)．KOMI 理論学会第5回学術集會集録，75-82，2001.
 - 9) 川上嘉明：自然死を創る終末期ケア 高齢者の最期を地域で看取る，現代社，2008.
 - 10) 金井一薫：KOMI ケア理論とその創出に至る歩み 日本発信の看護理論の構築をめざして，看護研究，52(3)，226-234，2019.
 - 11) 竹原歩：理論を評価する②クリティークと検証，看護研究，50(5)，500-507，2017.
- 注) 以下、竹原歩が示す Meleis (2017) の文献
Meleis, A. I.: A model for evaluation of theories: Description, analysis, critique, testing, and support. In *Theoretical Nursing: Development and progress* (6th ed). Philadelphia: Woters Kluwer, 172-197, 2017.

資料 質的統合法 (KJ 法) によるカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	研究素材の概要
観察・事実の情報化	観察目的の明確化	生活過程を整えるための観察	フットレーダーチャートは、レーダーチャートとの併用で、対象者の全体像を捉え、ケアの視点で生活過程を整えるための観察ができる
		互いの視点のズレを軌道修正	KOMIチャートの活用で、看護・介護者は互いの観察の視点のズレに気づき、軌道修正ができるようになった。観察の視点の一致はスタッフの迷いを少なくした
	観察の視点の変化	新たな小さな変化に気づく	KOMIチャートシステムの活用で、これまで気づけなかった重心児の持てる力、小さな変化に気づくようになった
		視点の変化で観察内容が精緻に	訪問介護事業所にケアコラボ(理論と実践をつなぐツール)を導入した結果、利用者の身体機能の変化と、個性に対する観察の視点の変化が表われた
	観察の視点の明確化	観察の視点に変化	ヘルパーがKOMIチャートを活用する中で観察の視点が変わり、ケアの方向性を見出すことができた
	観察の視点の一致と継続	ケアの方向性を共通認識できる	KOMIケア理論はケアの方向性を示す土台となり、観察力によって‘ものさし’が示す状況を読み取り、スタッフ間でケアの方向性を共通認識できる
		シートの改変で視点が一致	ケアリングシートのケア項目に、該当する必要度B項目の文言を追加することにより、スタッフの観察の視点が一致した
		継ぎ目のない観察	手術KOMIレーダーチャートは手術終了後から退室までの状態を記録する。病棟で使用しているレーダーチャート16項目と同一のため、共通の視点で手術室・病棟間の観察の継続が可能である
		その人らしさが見える	安定している時期に、サークルチャートに記載されている利用者の好きなことや特技、趣味を見つけていく関わりは、本人のこれからの生活を豊かなものにし、終末期に繋がる
	可視化できる情報	情報を可視化するチャート	情報を図として示すチャート
アセスメント・課題の明確化	生活過程をみつめるアセスメント	生活過程を整える視点を重視	KOMIケア理論の活用でケアの目的をチームで共有。どのような健康状態においても生活過程を整えることは看護の重要な役割である
		同じ視点で生活をもつめる	KOMIケア理論で、看護・介護者が同じ視点で生活をもつめ実践できるようになった
		KOMIチャートで健康的な生活をみる	人間の健康的な生活を描いたKOMIチャートの項目は細胞の造り替えを助け、人として生きる力になる
	チームで判定基準を共有	利用者の全体像を描く	KOMIチャートシステムのアセスメントは、ケア実践者の視点の共有ができるので、利用者の全体像を共通に描け、職種間の垣根を最小にする
		ものさしを使って判断	KOMIケア理論学習者は看護に迷ったとき、‘ケアのものさし’を看護であるか看護でないかの判断に活用していた
		ものさしで視点の共有	‘ケアのものさし’の活用によって、自分たちの看護の捉え方がまちまちであるとわかり、看護の視点が共有できた
		持てる力と欠落部分の判定	KOMIチャートで持てる力と不足している部分に分かり、そこにスタッフ全員が同じ視点に立って行動できた
	判断基準の明確化	持てる力・残された力に着目	運動機能チャートの作成で、重心児の小さな持てる力・残された力への、スタッフ間の共通理解が進んだ
		できる・わかることに着目	重心児の‘できること’を表現した判断ポイントを作成した結果、KOMIチャート上に「できる・わかる」が増え、その人らしさが表れるようになった
		チャートから看取りの今後を予測	レーダーチャートの生命力の姿の縮小と、KOMIチャートの生活の自立度の低下は、看取りへの心づもりができる
チャートから終末期の今後を予測		KOMIレーダーチャートから、終末期は疾病による苦痛よりも生活機能低下による不自由さが先行することが見えた	
危険要因を予測		産科用チャートは危険要因を可視化	KOMIレーダーチャートの項目を産科用に改変したマタニティレーダーチャートは、危険要因を視覚的に捉えられる

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	研究素材の概要
アセスメント・課題の明確化	多領域にわたるケアの指標	次に何をすべきかが見える	KOMIレーダーチャートに現れる生命力の姿や生活過程の制限の状況は、看護として次に何をすべきかが見えた
		凹みのある項目に援助が必要	KOMIレーダーチャートは生命を維持するための生活行動と連動しており、凹みのある項目には看護者の援助の必要があることが見えてきた
		ある疾患群の平均的な生命力の姿が明らかになる	外来透析患者213名生命過程の特徴を、KOMIレーダーチャートで見た。年齢や性別、透析歴別による大きな違いは見られず、殆ど同じ生命力の姿を表していた
	多領域で活かすケアの指標	認識・生命・生活過程の姿から必要なケアを予測	KOMI記録システムは、患者の認識・生命・生活過程のありようが手にとるようにわかり、患者に今本当に必要なケアを実践できる
		困難事例のケアに役立つ	精神疾患をもつ患者の全体像を見つめるにはKOMIチャートを用いて認識過程と生活過程をアセスメントし、全体像を掴んだ。激しい混乱のある急性期は、認識・行動面ともに乱れ、食べるなどの基本的な行動もとれなくなるが、安定に入った慢性期は、認識面では自立してくるが、家計に関する管理など行動面への支援が必要なことが読み取れた
		コメディカルスタッフと退院に向けての支援を共有	在宅を望む患者に対し、KOMIチャートシステムによる看護過程展開によって、コメディカルスタッフと退院に向けての支援のポイントが明らかになった
尊厳を保つ看護の指標	KOMIチャートの活用でその人らしい最期の迎え方や尊厳を保つ看護が明確になった。さらに亡くなる数日前のチャートが尊厳を保つ看護が行われていたかどうかを示す指標となる		
計画立案	ケアの方向軸がぶれない	チャートを計画立案に繋げる	利用者と介護者が一緒にKOMIチャートシステムをつけることでケア計画に繋がった
		チャートシステム活用で計画を立てる	ケアリングシートは、ヘルパーから「経時的な変化がつかみやすい」「身体状況だけでなく全体に目を向けた状況判断ができる」と好評であった、現場で必要としているもの、何があればケアプランができてくるのかがわかった
		サークルチャートはケアプランに活用できる	サークルチャートは、本人の生きてきた過程を丸ごと把握でき、ケアプランに活用できる
		記録システムの共同利用で計画立案	KOMIケア理論と記録システムを共同利用し、ケアマネジャーが初めてKOMIチャートをつけたところ、利用者の日常生活での不自由、不足な面に目が向けられ必要なサービスが分かった
	必要なケアが見える	チャートを通して必要なケアが見える	レーダーチャートとKOMIチャートから、病状・症状にとらわれることなく、生活過程を見つめ直すことで必要なケアが見え、看護本来のケアが実現できる
		チャートからケアの方向性を見いだす	ベビーレーダーチャートは児の症状や変化を可視化でき、ケアの方向性を見いだす
	ケアの方向軸がぶれない	チャートはケアの方向を導く	ベビーレーダーチャートはRDSの児の症状や、哺乳の確立と呼吸状態の関係など週数による発達から全体像を把握し、ケアの方向性を導きやすい
		関連機関や家族と目標を共有	利用者の生活の自立度を可視化できるKOMIチャートから導き出されたケアプランは、関連機関や家族が現状と目標を共有できる
		目的や根拠に基づくケア	KOMIケア理論を学習し、目的や根拠をもって行ったケアはありのままの利用者の姿が見え、ケアの方向軸がぶれない
		チームで視点がぶれない	過去5年間の看取りケアの分析から終末期から臨末期に共通項が多く、「スタンダードケアプラン」を作成。KOMIケア理論の視点でスタッフ全員がぶれることなく行動できている
看護の方向性を明確に示す	医学的に手の施しようがない状態であっても、「ケアのものさし」は看護の方向性を明確に示し、適切な生活の処方箋をつくる		
ケアの基本を見失わない	自然な過程を妨害しない、生命力を消耗させないケアが看取りケアの基本である。多くの持てる力が発揮できるように生活過程を整える一方で、スタッフの一生懸命さが患者の生命力の消耗につながってしまわないよう、十分な配慮が必要である		

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	研究素材の概要	
実施・結果	生きる力を引き出す	五感に触れた変化	持てる力への五感に触れたあらゆる変化は、患者の心を豊かにした	
		やる気や気持ちを引き出す	看護の好循環をもたらす	全ての症状を持てる力として働きかけた援助は、看護の好循環をもたらした
			患者の希望を実現	KOMIチャートから明らかになった多くの持てる力は、患者の望む自宅での生活を実現する
		自力で生きる力を引き出す	患者の生きる希望を引き出す	‘ケアのものさし’で持てる力に着目したケアの実践は、生活行動が拡大し、生きる希望を引き出した
			意欲を引き出す	もてる力の発見・活用はADLを拡大し、患者の自信や前向きな気持ちを引き出し、自分の力でやるとする意欲を引き出す
	その人らしさの尊重	その人らしさを尊重した生活過程を創る	KOMIケア理論の活用は、その人らしさを尊重した生活過程を創り、本来持っている力を引き出す	
		その人らしさに働きかけるケア	その人らしさに働きかけるケア	‘ケアのものさし’は、日々の生活の中から「その人らしさ」を見つめ、回復過程を支える
			患者の尊厳を守るケア	KOMIチャートから患者の認識は明瞭で行動面でオムツに失禁し排泄介助を受けることが生命力を大きく消耗させていた。排泄ケアの確立は患者の尊厳を守り生命力の幅を拡大した
		その人らしさの追求	自己決定や意思確認を支援する	不調を訴えたときの小さな変化を「行い整える内容」に具体的に記録し‘利用者’の意思’として残す
			最期まで自分らしく生きるを支援	KOMIケア理論で、全職員が共通言語を持ち、最期まで自分らしく生きるという、ホームホスピスの理念の実現を可能にした
実施・結果	生活の場を最期までその人らしく	生活過程を整える具体的なケア	KOMIケア理論の学びから、スタッフの視点は、利用者の生活過程を整え、在宅療養を支える具体的な看護ケアへと変化した	
		最期までその人らしさを追求	何をどう看護したらよいのか方向性を見い出せない終末期の患者に、KOMIケア理論を適用。患者・家族の持てる力を活用し、患者が心地よいと感じる環境を創ることで、最期までその人らしい時間を持つことができた	
	心身の著明な変化	病気をケアの視点で見つめることで回復機能を促進	病気をケアの視点で見つめ生活過程を整えた結果、健康な細胞の造り替えを促し、患者の心身は著明に変化した。病気をケアの視点で見つめることで、どのような関わりがその時の患者に必要なかが分かった	
		生活の処方箋により問題点の解消	KOMIケア理論の視点で病気(自閉症)をみつめ、快の刺激を利用した関わりで他害をしないニューロンネットワークを形成し強化する「生活の処方箋」を描き、スタッフ全員が共通の視点でケアを行った結果、他害の減少に繋がった	
		皮膚の再生能力を促進するケア	KOMIケア理論の適用で、発汗のたびに衣類交換を行い皮膚排泄物を除去と、夜間の処置を止めた十分な睡眠の確保は、皮膚の再生能力を促進し、回復過程を促進した	
		細々としたケアが生命過程と直結	KOMIレーダーチャートの拡大から、今まで無意識に行っていた細々とした生活過程を整えるケアが生命過程と直結していることがわかった	
		細々したケアで機能の回復の促進	チャートから「トイレに行くため」「洗面をするため」といった生活過程に密着させた離床が、全身の機能の回復を早めることがわかった	
	心身の回復機能を促進	「食」ケアでADLの拡大	KOMIチャートからの読み取りに‘ケアのものさし’をあて、害となっているものを取り除くことによって、「食べる」ことに対して変化を望み、ADLが拡大した	
		快の刺激の効果	KOMIケア理論活用による持てる力への快の刺激は、健康な力・持てる力を高めた	
		生命力の消耗に焦点をあてる	‘ケアのものさし’の活用で生命力を消耗させているものを読み取り、援助者が同じ視点で回復過程を促進する援助ができた	
回復のシステムを支援		タクティールケアは副交感神経優位な状態をつくり出し、回復のシステムの発動を助ける援助技術として有効である		
心身の回復機能を促進	開発チャートで順調な回復を確認	従来のクリニカルパスを使用した患者5名のKOMIレーダーチャートとKOMIチャートの結果から、スタッフの経験や知識に左右されない、ケアの視点で見つめて作成したナーシングパスを使用し、順調な回復を確認した		

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	研究素材の概要
実施・結果	予防ケアを導く	看護の視点による予防ケア	看護の視点で、睡眠導入に必要な副交感神経を優位にするケア(足もみ、足浴、下肢マッサージ)は、せん妄の発症予防に繋がった
		せん妄の発症や重症化の予防	‘看護の5つのものさし’を活用して行っていた、健康的な生活を支えるためのケアや患者心理に配慮したケアは、せん妄の発症や重症化の予防に繋がっていた
	ケアの継続と質の確保	ケアの方向性が一致	KOMIケア理論の学びはケアを導く視点を変化させ、方向性を一致させた。施設内サービスの質向上、職員の意欲向上があり、何より、看護・介護の視点の共有化が図られたことは最大の利点であった
		ケアの継続と質の向上に繋がる	摂食レーダーチャートの開発は、摂食機能レベルを可視化し、ケアの継続と質向上に繋がった
	ケアの質の確保と向上	ベビーレーダーチャートの開発で看護の質を確保	ベビーレーダーチャートは新人看護師でも同じようにつけることができ、先輩看護師との間で情報共有が可能で、看護の質確保に繋がる
		ケアリングシートによるケアの水準の確保	ケアリングシートは、前日どのように関わっていたのかが見え、その日行うケア指標になり、24時間の生活過程にそって一定の水準を保ったケアを実践できる
		新人看護師の指導教育に活用	ケアの質の差は、ケアの根拠への理解不足、実践したこと記録が残っていないことによる。スタンダードケアプラン、ケアリングシートの使用は、チーム間での情報共有や新人看護師の指導教育に活用でき、ケアの質向上に繋がる
	ケアの質の向上	ヘルパーのアセスメント力の向上	ヘルパーは学習会での‘気づき’から、利用者を主体にした方法‘持てる力’へと考え方を変化させ、利用者に変化が表れてきたことに気づいた。持てる力への気づきは、ヘルパーの的確な情報収集やアセスメント力、実践力に繋がった
		理論が必要なケアを生み出す	KOMIケア理論に支えられた看護師の存在は、患者に必要なケアを創出した
	看護者-患者関係の変化	患者の行動変容をもたらす	職員の視点の変化が利用者を安定させる
看護者の関わりが患者を変化させる			KOMIチャートの活用により、看護者の関わりが変化し、患者の認識・行動面に変化を及ぼし、持てる力を引き出した。患者自らが回復への悪循環を断ち切ることに成功した
看護者の行動変容をもたらす		患者の認識と行動の変化が看護師に変容をもたらす	KOMIチャートと‘ケアのものさし’の活用は結核患者の生活への認識と行動の幅を広げ、それが看護師の行動変容にも繋がった
やりがい・喜び	看護者のやりがい	患者のプラス面をみる看護の視点	マイナス面をみることからプラス面に心が動くことで看護の視点が明確になった
		仕事へのやりがい	実践の効果は仕事へのやりがいをもたらす
	看護者の喜び	看護者のやりがいに繋がる	急性期病院の外来にKOMIチャートを導入した結果、患者の生活過程を見つめた関わりができるようになり、KOMIチャートによる看護過程の展開は外来看護師のやりがいに繋がった
	看護者の喜び	患者の笑顔を引き出すケアは看護に喜びをもたらす	‘ケアのものさし’をあて、「外に出たい」「家に帰りたい」という患者の強い思いを健康な力として捉えたケアの実践は、患者の笑顔を引き出し、看護の喜びに繋がった

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	研究素材の概要
評価	可視化による評価	チャートでアクティビティの効果を確認	アクティビティの効果をKOMIチャートで確認できた
		チャートで生活リハビリの効果を可視化	看護・介護者が連携して行った生活リハビリの効果は、KOMIチャートで可視化できた
		チャートで光線療法の効果を確認	離床前に日光をあびることによって離床後の覚醒が高まることを、KOMIチャートで確認できた
		チャートでケア実践の効果を確認	ケア実践の効果は、KOMIレーダーチャート、KOMIチャートで確認できる
	シート類でケアの効果を確認	チャートでケア方針の成果を評価	グループホームのケア方針、「自分の居場所を持つ」「馴染みの関係をつくる」の実践の成果が、入所1年後のKOMIチャートで評価できた
		シート類を共有し評価に繋がる	スタンダードケアプラン、ケアリングシートは、ケア方針及びケアの根拠・方向性を導き、実践記録をチームで共有し評価に活用できる
	QOLの拡大	入浴前後の生命力の幅の変化	入浴前後の変化をKOMI記録システムで評価し、生命力の幅の広がりを認めた。在宅療養者にとって生活の変化や生きている実感に繋がっていると考えられる
		チャート欠落部分へのケア実践の効果	KOMI記録システムを活用し、チャートの欠落部分に着目してケアを実践した結果、チャートの生命の幅の拡大を確認できた
		日常生活の拡大を促す	KOMIチャートの活用は患者の日常生活を活性化させ、生活の拡大に繋がった
		行動面の広がり	KOMIチャートの読み取りから、食看護に焦点を当ててケアに取り組んだ結果、生活の幅が広がった
多職種連携が可能	生活の変化が身体に及ぼす影響がわかる	サークルチャートから生活の過ごし方の変化が身体に及ぼす影響がわかる	
	連携のためのKOMIチャートシステムの活用	多施設、多職種間で連携するためにはKOMIチャートシステムの活用が必要	
	ケアプランシートの活用で継続ケア	ケアプランシートの活用は、看護師・補助者間の情報共有と個別ケアの継続につながった	
	チャートやシートの共有による連携	チャートの開示は連携を深める KOMIチャートの開示は生活ニーズを可視化でき、多職種の連携を深める	
記録	実践が記録に反映	記録システムの共同利用が連携を可能にする	KOMIチャートシステムの共同利用で多職種の実践・連携が可能になった KOMIチャートから、家族と専門職との連携で在宅療養を支えるための条件を整えることができる
		理論(理念)の共有化による連携	KOMIケア理論は同じ視点で利用者の全体像を把握でき、多職種連携に有効 KOMIケア理論活用により、看護は病状・症状をアセスメント、具体的ケアは介護と連携協働する看取りの実践は、地域包括システムの構築に不可欠である KOMIケア理論は、利用者の生活や社会関係を「持てる力」として生かされたケア方針が共有でき、ケアネットワーク形成と展開が可能となった
	実践が記録に反映できる	実践が記録に反映できる	KOMI記録システムは、ケアの実践がケアプランや日々の記録に連動している
ケアの継続性を保証	退院指導に役立つ	患者の生活に即した指導が可能	KOMIチャートを退院サマリーとして活用し、患者の在宅での課題や支援の方向性、介護する家族の負担や不安が予測しやすくなり、患者・家族の生活に即した指導が可能になった
	継続看護に有効	病棟・外来・地域へと繋がるケア	在院日数の短縮もあり、患者は生活に不自由さや不安を抱えたまま退院する。外来でKOMIケア理論を活用し、患者の全体像を把握した結果、個別性のあるケア方針を導き出し、生命力の幅を広げる援助ができた KOMIチャートは看護の視点がアセスメント項目として表現されている。ケア内容が具体的に見えるため、病棟、外来、地域へと継続看護ができる受け皿が外来看護師の力でささえられるようになった
	退院後の生活を描ける	退院の時期や準備時期を判断 退院後の生活のイメージ化が可能	入院により生命過程・生活過程が整えられると、KOMIチャートから退院時期や退院後の生活支援の準備時期を判断することができる KOMIサマリーチャートは、患者自身が退院後の生活をイメージするのに有効であった

Effectiveness of The KOMI Care Theory in Nursing Practice and Its Practical Usefulness

Keiko Ishikawa and Hitoe Kanai

Summary

The KOMI Care Theory is a nursing theory developed by Hitoe Kanai on the basis of Florence Nightingale's philosophy of nursing. The nursing theory has been put into practice by quite a large number of nurses and care workers at their workplaces in Japan for more than a quarter of a century.

This paper analyzed the extensive research literatures that accumulated through 22 yearlong series of publication by the KOMI Care Society, which was established in 1997 and completed its mission in 2018. Its members, the majority of whom were nurses and care professionals who adopted the KOMI Care Theory in daily regular practices of their professions, made most of the fact-finding contributions. Our analysis on the fruits of the KOMI Care Society's literary aggregation clearly proved the effectiveness of the KOMI Care Theory in nursing practice and made explicit its practical usefulness at every scene of nursing. The analysis method used in this research was the mixture of quantitative and qualitative approaches.

As a result, it was made clear that the KOMI Care Theory has long been adopted and practiced by healthcare professionals of many fields and its usefulness was so obvious as to depict itself into relief in the light of "practical nursing process". In other words, the KOMI Care Theory was proven professionally useful as a practical theory that leads healthcare practitioners without losing directions in their practices and technically effective at every stage of problem-solving processes.

Keywords: The KOMI Care Theory, practical theory, effectiveness, usefulness

